In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	大学生のアカデミックライティング教育におけるアカデミックリテラシーズアプローチの可能性と課題
Author	西垣, 順子
Citation	大阪市立大学大学教育. 8 巻 1 号, p.47-51.
Issue Date	2010-09
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	
DOI	10.24544/ocu.20171218-191

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

■ 報告

大学生のアカデミックライティング教育における アカデミックリテラシーズアプローチの可能性と課題

Introduction and discussion on academic literacies approach to academic writing education in university learning

西 垣 順 子
大阪市立大学大学教育研究センター

NISHIGAKI, Junko
Center for Research and Development of Higher Education, Osaka City University

キーワード：アカデミックリテラシーズアプローチ、アカデミックライティング、学生の生涯発達、大学での知識生産と学習
Keywords: academic literacies approach, academic writing, life-long development, knowledge production and learning in university

1．Academic Literacies Approach

1．1．アカデミックリテラシーズアプローチの提案

アカデミックリテラシーズアプローチ（Academic Literacies Approach，以下AcLitsと略）は、大学教育におけるアカデミックライティング教育に関する研究視点として、1990年代後半から今日に至るまで主にヨーロッパで影響力をもっている理論である。イギリスやアメリカの大学には、学生にレポートや論文の書き方を指導するための専門家（大多数が応用言語学を専門とする）を擁するライティングセンターが設置されている。人員の数や提供するプログラムの内容と規模は大学によって異なるが、論文の組み立て方、資料の引用の仕方、アカデミックライティングのための文法指導など、論文を執筆するために必要なスキル等についての講義やセミナーを実施したり、学生の個別相談に応じたりしている。また、ライティングセンターに勤務するスタッフらによって作られているアカデミックライティング教育に関する学会（EATAW: European Association of Teaching Academic Writingなど）もある。AcLitsはそのような教育実践と教育研究の中から提案されたもので、Lea & Streetが1998年にStudies in Higher Educationに執筆した論文“Student writing in higher education: An academic literacies approach”を議論の出発点と考えることができる。本節では以下に、このLea & Street（1998）で主張されているAcLitsについて説明する。

Lea & Street（1998）は、大学教育におけるアカデミックライティング教育の検討視点は、「学習スキルモデル」「学術社会化（academic socialization）モデル[1]」とAcLitsの3つのアプローチに分類できるとしている。学習スキルモデルは、リテラシーを文脈や領域を超えて転移可能なスキルのセットとみなし、学生の問題（スキル不足など）を補うことをアカデミックライティング教育の目的と考える。これに対して学術社会化モデルは、アカデミックライティング教育を大学という新しい学習文化への移行と考える。学生のアカデミックライティングに対する認識やスキルの不足を、学生の問題点や欠点としてとらえるのではなく、学生が入学以前に過ごしてきた文化と大学文化の違いと考えるため、学習者としての学生の認識や感情に配慮したモデルであると言える。その一方で、大学での学習やアカデミックライティングを、文脈や領域を超えた同質性の高いものと考え、アカデミックライティングを価値中立的で、どのような社会的文脈を背負う学生にとっても同じようにアクセス可能な表現媒体と考える傾向が強い。他方のAcLitsは、これら2つのモデル

を包括した上で、アカデミックライティングの教育と学習における、これら2つのモデルでは説明できない重要な現象を説明しうるものとして提案されている。

1．2．アカデミックリテラシーズアプローチの概要

アカデミックリテラシーズアプローチの提案に際してLea & Street（1988）は、学生が執筆したレポートやそれに対する教員からの評価（コメントや点数）を分析するとともに、アカデミックライティングの教育と学習について教員と学生にインタビュー調査を行った。これらの調査の結果、前項で述べた学習スキルモデルと学術社会化モデルでは説明できない次の2点つの現象が明らかになった。1つは、学生に要求されるアカデミックライティングが文脈ごとに非常に多様であり、それらの間に優劣をつけること（どの形式が「正統」でどれが「正統」からの逸脱であるかを判断するといったこと）は不可能であったことである（そのため、アカデミックリテラシーズと複数形で表現される）。このことは、学習スキルモデルや学術社会化モデルが想定する状況とは大きく異なる。アカデミックライティングのあり方はディシプリンによって異なるだけではなく、ディシプリンの中でさえも多様で、相互に優劣や正統・非正統を判断できるようなものではなかった。もう1つは、大学での学習において要求されるリテラシーを身につける過程において、学生の発言に人格的・感情的次元でしか解釈のできないものがしばしばみられたことである。一人称の使用を抑制したり、自分自身の個人的な体験や思いを書くことを抑制した文章について、学生が「これは自分の文章ではない」「この文章を書いている自分は本当の自分ではない」という感覚を持ったり、自分がこれまでに書いてきた文章の書き方とは異なる書き方を要求されることに対して、納得できない思いを持つ学生も少なくなかった。このような現象は、上述の学習スキルモデルや学術社会化モデルでは説明ができない。そこでAcLitsはこれら2つの現象を説明するために、アカデミックライティングはスキル獲得や大学環境への順応という次元で捉えられるものではなく、認識論的（epistemological）に、また人格的・感情的次元で理解されるものであると考える。

アカデミックライティングを認識論的次元で理解するということは、アカデミックライティングは大学に代表されるアカデミック世界における知識の生産・共有・学習のあり方と深い関わりのあるものであること、及び大学という場は多様な知識の生産・共有・学習のあり方が複雑に交差する場であることを認め、学生はそのような場において書くことを求められているのだと理解することである。Lea & Street（1988）やLea & Stierer（2000）などで示されるインタビュー調査の結果によれば、各教員が持つアカデミックライティングとその教育についての信念は、それぞれの教員の研究者としての体験とキャリアに影響されている。その結果として学生は、各教員から多様なアカデミックライティングを求められる。アカデミックライティングを認識論的次元で理解するとき、アカデミックライティングの多様性は、いわゆる「正統なアカデミックライティング」からの逸脱が多いことを意味するのでは決してなく、大学における知識の生産・共有・学習のあり方の多様性そのものを反映していることになる。アカデミックライティングは領域普遍的で均一なスキルの集合体とも、学習に関する普遍的で一般的な習慣やルールの集合体とも理解できないのである。

アカデミックライティングについて学生の立場から理解する場合、人格的・感情的次元での理解は欠かせない。アカデミックライティングの学習プロセスは非常に複雑なものである。学生にとってアカデミックライティングは、大学という新しい場での新しい学習のスタイルである。学生は知識情報の受動的な受け手ではなく能動的な解釈者としての役割を求められる。その一方で、評価者と被評価者という権威関係において、自分の書いたものが評定され批判される立場にもいる。さらに複雑なことに、大学において実際に知識の生産・共有・学習に学生がどのように参画するかは、授業によっても教員と学生の属性によっても異なる。このように多様で相矛盾する立場にあることは、学生の自らの学習やアカデミックライティングへの姿勢に対する認識を混乱させる。

上述の1人称使用の制限のように、入学前に慣れ親しんだ表現と思考方法以外の方法を求められることは、ある意味で異なる人格になってみることを求めら

れるということでもある。労働経験のある成人学生などの場合、大学で求められるアカデミックライティングとは異なる表現方法や思考方法で一定の成功を収めていることも少なくない。その彼らが新しい思考方法や表現方法を求められることは、彼らのそれまでのキャリアや経験、さらには人格の否定であるように感じられることもある（Lea & Stierer, 2000）。しかしこのことは学生が、大学での学びに消極的であることを意味するわけではない。大学での知識の生産・共有・学習に参画していくプロセスは、そもそもそれ自体が学生の内面的葛藤を伴うものとして理解されなくてはならないということである。

2．AcLitsの教育への展開

Lea & Street（1998）は、学生が大学での学習においてレポートなどを書くことに成功していくためには、それぞれの文脈に合わせて書き方や考え方をスイッチさせる必要があるとしている。だが実際には、AcLitsが示すようなアカデミックライティングの多様性と複雑さを多くの大学教員が認識していないため、どのように書けばよいかについて学生に与えられる情報は非常に不明確である。その結果として学生は、自分の思考と表現をどのようにスイッチさせればよいかがわからずに混乱していることが多い。そしてAcLitsを提唱したLeaたちは、求められるアカデミックライティング教育のあり方として、このスイッチングを支援できる教育方法を開発することの重要性を主張している。そして実際に、いくつかの種類の授業（入学直前の学生に対するオリエンテーション的授業や専門職大学院の授業、教員養成大学での授業、等々）において、どのようなアカデミックライティングが求められるかの情報を明示する教授法を開発している（e.g., Lea, 2004; Lea & Street, 2006）。

Leaらの教授法開発研究の成果としては、次の2つをあげることができる。ひとつは、従来は曖昧にしか示されてこなかったアカデミックライティングの文脈ごとの多様性を明示することにより、学生が文章を書くときに必要なスイッチングを一定程度支援できるということである。もうひとつは、大学での知識の生産・共有・学習プロセスにおける教員と学生の関係のあり方を、明示することの重要さと難しさである。Lea（2004）においては、AcLitsに基づく授業デザインに対して学生が抵抗を示すことも報告されている。特に、学生の学習やアカデミックライティングの評価について、実際の評価は授業を通じての教員と学生の相互作用を経て作られるという現実に対して、学生はしばしば、事前に作成された明確な評価基準に従った「客観的な評価」を強く求めた。AcLitsに従えば、そのような単純明快な「客観的評価」そのものが存在しえない（学生が想定する「客観的評価」自体が主観的要素を含まざるを得ないものである）のだが、この点について学生の理解を得ることは容易ではなかった。

3．AcLitsに基づくアカデミックライティング教育検討の課題

第1節で述べたように、大学でのアカデミックライティング実践においては、学習スキルモデルや学術社会化モデルでは説明できない重要な現象が存在する。そしてAcLitsは、そのような現象が生じる背景をうまく説明してはいる。しかしその一方で、AcLitsに基づくアカデミックライティング教育の教授法には、アカデミックライティングも含めた学生のライティング力を伸長する上で、限界もあるのではないかと思われる。

無論、AcLitsから提案されるような、文脈ごとに異なるアカデミックライティングのあり方を学生に対して明示するという教授法は、それまでは暗黙の了解であった言葉の使い方に関する自覚や学生自身の混乱への自覚を高める効果もあり、学生のアカデミックライティング力の伸長に役に立つ部分もあるだろうとは思われる。しかしAcLitsに基づくこのような教授法は学術社会化モデルが示唆するであろう教授法を、より詳細にしただけになってしまう恐れがある。このことはAcLitsに基づく教授法に対して学生が、明確で客観的な評価基準の明示を求めたことと表裏一体の関係にあると考えることができる。つまり学生としては、自分自身は何のためにアカデミックライティングに従事するのか、さらには、大学という知識生産や学習の場に

おいて自らがどのような役割を果たすのかを不問にしたままで、どのように書けば良く評価されるのかを知りたいという、受動的な姿勢から脱却できないのである。

このような限界が生じる背景としては、AcLitsが言語学に基づくアプローチであるために、議論の中心が言語そのもの（具体的には学生によって書かれる文章と書くというパフォーマンス）に置かれがちであり、学生の人格的な成長・発達を中心に検討することが難しいことをあげることができるだろう。つまり、学生がアカデミックライティング力を獲得するべきであるということは自明のこととして扱われており、アカデミックライティングがなぜ学生に必要なのかについて、学生の立場からの検討が弱いのである。

学生が自分自身の立ち位置から、アカデミックライティングの意義を認識しない限り、学生がより能動的にアカデミックライティングに臨むことには限界があると思われる。この点に関連して、教育哲学の研究からは、アカデミックライティングも含むリテラシーの意味を学生や生徒の全人格的な成長という観点から問い直すべきであるという指摘がある。例えばFulford (2009a) は、大学におけるアカデミックライティングのための教育カリキュラムは、学生に自分自身を発見・再発見させるものとして機能するように作られなければならないと主張している。そして彼女は、イギリスの大学教育において近年、学生にレポートの詳細なひな型を提示してそれに即して書くことを求める教育方法が過度に用いられている現状について、それは学生の思考を型にはめてしまい、学生自身による自由で深い思考を妨げる教育であるとして批判している。Fulford（2009a）によれば、学生が自分自身を発見・再発見するためには、必ずしもスムーズに書けない状況を学生自身が体験することも必要であり、ひな型のような書くための手がかりを与えて学生の書くスピードを速くすること自体が、学生の深い思考を妨げる可能性があるのである。そのFulfordは別の論文で(Fulford, 2009b)、AcLitsも含めたニューリテラシー(new literacy) 研究[2]と呼ばれる諸研究が、リテラシーを単なるスキルの集合体として扱う研究と同様に、「われわれが人であることに対して言葉はどのように重要であるのか」について哲学的に検討できていないとして批判している。彼女によれば、このような人間発達に関する哲学的検討の欠如のため、ニューリテラシー研究は未だに、リテラシー発達をスキル獲得や社会への順応と考える諸研究（学習スキルモデルと学術的社会化モデルに相当）が主張する読み書き教育のあり方を、超えられないのである。

Fulfordの研究は教育哲学によるものであるため、具体的な教授方法の提案にはあまり踏み込んでいないが、AcLitsの限界を超えるアカデミックライティングのための教育のあり方を考える上で有効な指摘ではないかと思われる。学生の発達も大学教育のあり方も、ひとつの学問からだけのアプローチでは検討しきれないものであり、決して言語学のアプローチが悪いというのではない。AcLitsが指摘するような複雑な知識生産と学習の場である大学において、学生が知的にも人格的にも成長していくことのできるアカデミックライティング教育のあり方を追求するためには、学生にとってアカデミックライティングがなぜ必要なのか、大学での知識生産・共有に参画することで彼らは何を得ることができるのかを、理論的にも実証的にも様々な角度から考え合わせていく必要があるのであろう。

注

1）academic socializationには日本語の定訳がないため、本稿では「学術社会化」と訳した。アカデミックライティング（academic writing）のacademicと意味に違いはなく、どちらも「学術上の」「学問のための」といった意味である。なおアカデミックライティングは日本語として定着していると考え、学術ライティングとは表記せずにアカデミックライティングとした。

2）Fulford（2009b）は、AcLitsを直接的に批判しているのではなく、AcLitsも含めたニューリテラシー研究全体を批判している。ニューリテラシー研究とは、リテラシーを社会文化的文脈に埋め込まれたものとみなす研究上の立場であり、リテラシー獲得を読み書きに関連する特定の支配的なスキルと習慣の獲得とみなすリテラシー観に対抗するものである。ニューリテラシー研究によると、リテラシーのあらゆる形式は、それぞれに社会文化的背景を持ったものであり、いずれの形式も「より正統」とか「正統でない」と判断されるようなものではない。また、個人が使用するリテラシーの形式は、その個人を取

り巻く社会的権力的関係やその個人の人格を巻き込んだものであると考える。AcLitsはこのようなニューリテラシー研究を背景として、大学でのアカデミックライティングに関して登場したアプローチである。

引用文献

Fulford, A. (2009a), "Ventriloquising the voice: Writing in the university", *Journal of Philosophy of Education*, vol.43, 223-237.

Fulford, A. (2009b), "Cavell, literacy and what it means to read", *Ethics and Education*, vol.4, 43-55.

Lea, M. R., and Street, B.V. (1998), "Student writing in higher education: An academic literacies approach", *Studies in Higher Education*, vol.23, pp.157-172.

Lea, Mary R., & Stierer, B. (2000), *Student writing in higher education: New contexts*. Buckingham, UK: Open University Press.

Lea, M. R. (2004), "Academic literacies: A pedagogy for course design", *Studies in Higher Education*, vol.29, 739-756.

Lea, M.R., & Street, B.V. (2006), "The "academic literacies" model: Theory and applications", *Theory into Practice*, vol.45, 368-377.